

機動戦士ガンダム 鉄  
血のオルフェンズ —  
—The Dogs of War

QgkJwfXtqk

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

鉄血のオルフェンズの本編再構成です。

オリシユタグがありますが、オリキャラがサポキャラで三日月たちの周囲に居るというだけで、主人公じゃないのでご注意ください。

基本的に本編への不満解消とストレス発散目的で書いていますんで、不定期なのはご勘弁。

国家とか組織とかで書いてて理解できない所はMYルールで勝手に改変してますんで、鉄血本編と設定ちやうわー！とか言われても知らんがなな姿勢で逝かせて頂きます。

後、オリキャラ大集合&他所の版權キャラ様大参加の闇鍋仕様大サトー風味になるます。  
構わんでー という人だけお読みください。

書いてて思ったのですよ。

4 大勢力の組み分けが理解できないと言うか、アーブラウなんて成立したらアメリカが喉元にナイフ突きつける気かゴルアとキレルし、オセアニア連邦は日中印の3か国系で絶対に意見の纏まる未来が見えないし？

あ、アフリカンユニオンは大丈夫だと思います。

ええ。

白人国家としてのアイデンティティ皆無な、イスラム系国家に成り果てるでしょうけども（お

で、最終的にはレコンキスタ確定でしょうけども

尚、本作のMSはMH臭マシマシですんで、そこら辺、ヨロシク!!

というか作中の飛び道具と肉弾戦のパワーバランスとかも何ぞ狂ってるので、そこら辺も調整調整要調整である。

要するにダインスレイブ死すべし、慈悲は無い。

暗殺一本勝ちも禁止でお送りします。

GTMへのデザインの変更が悪いとは言わないし、デザイナードとしてMHの手足のバランスだとチャンバラが難しいから嫌になったのかなあとか思う。

斜めからのポージングは格好良いけど、真正面から見ると妙に左右が狭いなあとか思う。

後、頭部がなあとかもも。

でも、ベイビー

GTMって余り格好良く感じられないんだよなあ。

後、それこそ二桁年単位で増えて来ていたMHのデザインを、短期間で一新する勢いで生み出されたGTMのデザインって、その、正直、どれも似ててなあ（嘆息

重MHの重厚感と駆逐MHの危うさとかの差が、GTMじゃ感じられないのがなあ。

# 目次

1	1	o	l
3	2	g	l
		s	l
		o	l
		f	e
		w	t
		a	s
		r	l
			i
			p
			t
			h
			e
68	34	1	d



l | l | l e t   s l i p   t h e   d o g s   o f  
w a r

+

荒野に刻まれた道を走る一台の自動車。

未舗装な、荒れた道ではあったが車は滑るように走っている。

火星ではめつたに無い高級車であった。

そのハンドルを握っているのは女性、お堅い服装と表情をした妙齡のフミタン・アドモスという名の女性だった。

「お嬢様、見えて参りました」

甘さの無いフミタンの目が眼鏡越しに、バックミラー越しに後ろに視線を送る。

本革張りの後部座席に柔らかく腰掛けるのは赤い外出用のドレスを纏った、豊かな金糸の髪が特徴的な少女だった。

名をクーデリア・藍那・バーンスタインという。

後には革命の乙女とも稀代の悪女とも言われる、火星を代表する政治家となる女傑であつたが、今はまだあどけなさを表情に残した少女だつた。

否、今も既に政治家としての立場、或は影響力を得つつあつた。

火星でも有数の名家出身のクーデリアは、16歳の若さで大学を卒業し、その後は火星の人権問題——独立運動へと参加していた。

その上で、雑多な運動家の集団を、ノアキスの七月会議ではまとめ上げてみせたのだ。既に火星独立運動の中心人物の1人と目されていた。

そんな政治的怪物の片鱗を見せ始めていたクーデリアであつたが、CGSの施設を見る目には幾ばくかの不安があつた。

年相応と言つても良い。

「あれがCGSの……」

防弾遮光ガラス越しに大きな塔のようなものが見えた。

CGS、即ちクリュセ・ガード・セキュリティ社の本社設備——管制塔だつた。

目を細めてクーデリアは見る。

クリュセ市郊外、荒涼とした大地の上に設けられたCGS本社は、火星に居を構える

中堅規模以上の民間軍事会社<sup>C</sup>の例に漏れず、実質、軍事拠点の如き外観をしていた。

否、元々が厄災戦時代に作られた中規模の整備廠であった為、生粋の軍事拠点と言えるだろう。

火星とその周辺宙域を活動圏に収めるCGSは、その実働戦力として1隻の強襲装甲艦と武装MW隊2個中隊、そして軽歩兵1個中隊から成っていた。

特徴としては戦闘要員の実に6割が少年兵だと言う事だろう。

補助兵力としてまだ年若い少年を兵卒に採用するのは、治安が悪く仕事も少ない火星では極々普通の事ではあったが、それでも戦闘要員の半数を超えるレベルで使っているのはこのCGS位のものであった。

そしてそれこそが、クーデリアがCGSを選んだ理由でもあった。

「手筈の方は整っているのかしら」

「はい。CGS本社にて件の少年兵たちと面談、その後、数日内には地球へ向けて旅立つ予定に変更はありません」

「問題は無かった？」

「いえお嬢様。CGSのマルバ社長も依頼額と手付金のお話をした所、快く引き受けて下さいました」

「そうでしたか、苦勞を掛けます。貴方のお蔭で私は活動出来る様なものね」

クーデリアの目元が軋む。

金銭で人の矜持を買う様なやり方が正しいと思える程に薄汚れていない彼女にとって、些か以上に重い行為であった。

そして、それを自分が直接行うのではなく、他人にさせていると言う事も。

「そう言つて頂けるだけで充分というものです。尚、地球への渡航申請も、ノブリス氏經由でギャラルホルンに提出していますので、数日中には航路使用許可も下りる筈です」

渡航許可——航路使用申請と言えば言葉は厳ついが、ギャラルホルンが星間航路の使用状況の把握と警備の為のものである為、申請が却下される事など滅多に無かつた。

「現在、火星―地球間航路は安全な模様です。ギャラルホルンが先月から特別航路掃討作戦を行っていて、夜明けの地平線団などの大規模な宇宙海賊は離れているとの事です」

星間航路の安全を護る事はギャラルホルンの業務ではあったが、金星―地球―火星との航路は余りにも長大な為、十全に行えているとはとても言えないものであった。

又、火星地球間の経済交流も低調である為、ギャラルホルンも星間交易路の保護に積極的では無いと言う事も理由にあった。

火星は現在、経済的な低迷とそれに起因する政治的治安の混乱が断続的に続いているが為、地球圏から見て優良な投資先とは見られていなかった。

クリュセの他、幾つのも自治領が存在する火星は、地球の事実上の植民地である事も、経済活動が低調な理由であったが、それ以上に治安の悪さが問題であった。

ハーフメタルなどの地下資源はそれなりに豊富な火星であるが、劣悪な治安等の環境問題から産業を成り立たせ続けるコストが、余りにも過大だったのだ。

経済が悪いから治安が悪い。

治安が悪いから経済が悪い。

ある意味で救いようのないスパイラルの下に火星の現状は存在していた。

だからこそ、クーデリア・藍那・バーンスタインが居る。

クーデリア・藍那・バーンスタインが主導権を握った。

従来の火星解放運動が権利面からの自治権拡大を目指したものであったのに対し、クーデリアは経済の安定と成長軌道に乗せる事こそが火星の問題を解決しようと主張し、それを海千山千の運動家たちに認めさせたのだ。

今回、クーデリアが地球を目指すのも、この為であった。

クリュセ自治区の法的統治権国であるアープラウの首相である蒔苗東護ノ介との面談を行い、クリュセ自治区の主要産業であるハーフメタルの採掘権と、そこに関わる諸権益の不平等な現状の是正を行うのだ。

1足飛びに交渉が妥結する筈もないが、事前交渉では好感触を得ていたが為、クーデリアは直接に蒔苗と会う事によって交渉の促進を図る積りであった。

「帰りまでそうであつて欲しいものね」

憂鬱そうに零すクーデリア。

自身の身の安全でもあるが、宇宙海賊の跋扈も又、火星の経済活動を停滞させる要因

である。

気楽に思える問題では無かった。

クーデリア・藍那・バーンスタインという少女は、ギャラルホルンにとって些か問題のある人物であった。

否、ギャラルホルンではなく、ギャラルホルン火星支部にとって。

細かく言えば、火星支部の支部長であるコーラル・コンラッド三佐にとって。

火星域にあつては貴重品と言つてよい天然革張りのソファに身を沈めながら、コーラルは床に映し出された火星を見下ろす。

否、画像では無い。

実物だ。

火星衛星軌道上に浮かぶギャラルホルンの衛星基地スリュムヘイムの支部長執務室

は、分厚い透過ガラス越しに火星の大地を睥睨するのだ。  
揺らす靴先で火星を蹴り、そして笑う。

「クーデリア、あの目障りな小娘もこれで終わりだな？」

「はっ、必ずや！」

直立不動、腕を背中に組んで声を上げるオーリス・ステンジャ。

襟元には一尉の階級章が輝いている。

まだ若いながらも、欲望に炙られた顔をした男だった。

「小娘の生死を問う様な無粋な真似はせん。消せばよい、好きにやれ」

言外に黽つても良いと告げるコーラルに、オーリスは貌の笑みを深くする。

「有難く」

ギャラルホルンにとつて火星支部とは、余り利益の出ない場所であった。

星間距離がある為に航路保護にコストが掛かる割に、経済活動が停滞している為に航路利用者自体が少ない為、軽視されていた。

形式として第5鎮定軍という正規部隊ナシバールフォースが駐留していたが、保有する戦力がハーフビーク級戦艦1隻を旗艦とする戦艦4隻で編成されている第51戦隊と第5独立装甲連隊（未充足）しかない辺り、それが表れていた。

特に装甲連隊は酷い状況にあった。

MS部隊こそ1個中隊と完全充足状態であったが、その半数以上が旧式化したゲイレル・フレイム騎であった。

MW部隊は4個中隊（定数96機）が1個大隊編制（42機）と半分以下の有様。歩兵部隊も3個中隊の所を2個中隊しか編制していなかった。

この程度の戦力で火星の治安を維持できるのかと言えば、正直な話として不可能である。

それを可能としているのは、力を振るう際には一切の躊躇をしないという行動方針と、PMSCの積極的な活用であった。

警告すら発する事なく火器を扱うギャラルホルンと、野戦服の上に赤いジャケットを羽織っただけで我が物顔に振る舞うPMSCは、火星の一般住民にとって怨嗟と恐怖の

対象であつた。

暴君の様に火星に君臨するギャラルホルン。

だがそれでも尚、ギャラルホルンの将兵にとって火星は好ましい配置では無かつた。

口の悪い士官の中には、「島流し」等と揶揄する者も居た。

地球出身者、それも七名家セブンスターズとそれに準ずる家の出身者が配置される事など先ず無いと

いう辺りに、それが表れていた。

支部の管理責任者に三佐の階級の者を充てている事も、その表れであるだろう。

だが同時に、中央から離れたこの場所は、腐敗した人間にとっては私腹を肥やすのに最適の場所であつたのだ。

特に、コーラル・コンラッドの様な人間にとっては。

将来の本部栄転に備えて蓄財に励むコーラルにとって、現状の支配体制と経済環境を一変させようとするクーデリアは悪であつた。

邪悪な敵であつた。

否、コーラルだけでは無い。

既得の権益の上で栄華を貪る者にとつて、等しく敵であつた。

それは、例え血を分けた身内であつたとしても、同じであつた。

先ほどまでこの部屋で恐縮しつつも目元を歪めていた、クーデリアの父にしてクリュ

セ自治区の首相でもあるノーマン・バーンスタインを思い出してコーラルは嗤う。

コーラルは理解していた。

ノーマンにとってもクーデリアが邪魔である事を。

でなければ、自分の娘の情報を自分から売りに来る筈はないのだから。

「父親からも見捨てられた小娘だ、好きに使っても問題は無かろう」

但し、と続ける。

「本部監査局からの特別監査が近い。時間を掛ける訳にはいかん事は忘れるなよ」

「お任せ下さい。旧式のMWしか持たぬような木っ端な相手です。第1遊撃隊に我がMSを加えるですから半日もせず捕えてみせましょう」

「うむ、期待する」

退室したオーリス。

コーラルにとってオーリスは信用の置ける部下であるのと同時に、地球本星へのコネとしても重要な人物であった。

コンラッド家は代々、ギャラルホルンの上級士官を輩出している家なのだから。

本来であればオーリスは地球地上軍か地球外縁統制統合艦隊のMS部隊に居るべき人間であつた。

それが火星に居る理由は、本人が志願したからなのだ。

冒険を試みたい、と。

そんな人間の経歴に、間違つてもこんな場所で汚れを付けさせる訳には行かなかつた。

卓上の通話機を押す。

「私だ、克蘭ク二尉は居るかね？」

コーラルは保険を掛ける事とした。

動力源にエイハブ・リアクターを使用しているCGS本社は、そのエイハブ・リアクター固有の問題からクリュセの市街地からかなり離れた場所にあった。

無尽蔵と言つてよいエネルギーを発生させるエイハブ・リアクターだが、対価として稼働時にエイハブ粒子を生み出す。

エイハブ粒子自体は慣性制御効果を持つという優れた特性があり、宇宙空間にあつては搭載するMSや艦船、或はコロニーなどで動力の供給と同時に擬似重力を発生させる、素晴らしい存在であつた。

問題は、エイハブ粒子は短時間で崩壊する事であり、そして粒子崩壊時に周囲へと強烈な磁気を放射してしまうという事である。

即ち、エイハブ・リアクターの周囲では常に磁気嵐が吹き荒れている様なものなのだ。故にエイハブ・リアクターは、平時ではその理由の如何を問わず、住宅街その他への持ち込みが禁止されていた。

そんなCGS本社周辺は、見事なまでの荒野が広がっていた。水気も少ないため、植物も殆ど生い茂る事の無い荒野。

故に、CGSの隊員にとって格好の訓練場となつていた。

体力の養成を目的とした基礎訓練に始まって格闘訓練に射撃訓練、一部の者はMWの訓練も行っている。

その中には、地雷敷設に関するものもあった。

「馬鹿野郎、もっと素早くやれ！」

拳骨が、濃緑の戦闘作業服を着るのではなく着られていると感じられる、まだあどけなさの残る子供 —— 少年兵の頬をえぐる。

「わっ!?!」

ぶっ倒れる少年兵。

殴ったのは、ガタイの良い大人だ。

此方は黄色系の戦闘作業服をだらしなく着崩していた。

その表情には怒りよりも陰性の笑いがあった。

隣に居たもう一人の大人も笑いながら、倒れた少年兵を蹴る。

「チンタラやってたら死ぬぞ。死にてえのか、ああ？」

「だけど教官はっ!？」

抗議に声を上げようとした別の少年兵が、蹴られた。

倒れそうになった所で襟元を掴まれて引き起こされる。

それは決して優しさではない。

「誰が口を開いて良いっていったか。一番組舐めてんじゃねえぞ？」

睨みつけて叫ぶ。

「今、ここに居るのは俺だ。俺たちだ。俺たちの言う事を聞け、餓鬼ども!!」

大人たち、CGS一番組の隊員たちは少年兵の訓練を見る為に居る訳じゃ無かった。

訓練を見るという名目で、来ては居た。

だがその性根では、少年兵をいびり日頃の憂さを発散する積りであった。

だからこそその暴力。

暴言。

悔しそうに顔を歪めている少年兵たち。

それを愉悅げに見ている大人たち。

CGS内で存在する大人たち一番組と子供たちの三番組の格差ヒエラルキーがそれを許していた。

いた、過去形になる。

「手前から最近、調子に乗ってつから、俺らが現実を思い出させてやるぜ」

振り上げた腕が、掴まれた。

太いだけの腕が、鋼をより合わせた様な鍛え上げられた腕によって掴まれる。

掴んだのは青灰色の戦闘作業服を着た壮年期に入りたてと思いき若い男だ。

少年兵が喜色を浮かべて叫んだ。

「教官!!」

教官と呼ばれた男、ビクター・ヒースクリフはその呼び名通り、子供たち三番組の教官役であった。

「おいおい、訓練で手を出すとはどういう見だ？」

声は穏やかだったが、目つきは剣呑さを通り越していた。

「ガキに手を出されでもしたか？」

「ちげえよ教育だ教育！ 手を離せよ馬鹿野郎!!」

「訓練で暴行すんなって俺は言つたよなあ？」

掴んだ腕を振りあげながら尋ねる、否、睨む。

今朝、一番組の大人たちが自分から三番組年少班の指導役をすると言つて来た。

訓練用の地雷が入ったので、俺たちは暇しているからと。

そして教官ドリル・サージェントとして三番組の全権を持つビクターは、それを受け入れた。

本来は教育補助官として三番組の年長者が見るのだが、本日は所用があつて参加出来づらかつた為、受け入れた格好であつた。

ビクターも一番組の人間がロクデナシ揃いであるとは思つていたが、厳しい訓練はしても粗暴な訓練はしないと思つていたからだ。

軍隊で弱いモノを虐めるのは良く在る話だ。

同時に、弱い者いじめをしていた奴が戦場で後ろ弾喰らうのも良く在る話だ。

だから、常識的に考えて馬鹿な行為はしないと思つていたので。

ビクターは自分の内にある一番組への評価を三段階以上も下げながら掴んだ腕を離す。

腕を掴まれていた男は、大げさに身体を振り返つて吠える。

「デメエが凶に乗らせた餓鬼に躰が必要なんだよ、馬鹿野郎！」

一番組の言う事を聞かなくなつたと険しい顔をして唾を飛ばす。

対するビクターも笑う。

攻撃的な顔を作る。

「俺が育ててるのは兵隊だ。テメエらの玩具じゃねえんだよ」

「何だと、調子に乗りやがって、何様の積りだっ!!」

「俺は偉いからな。マルバから三番組の教育の全部を預かってるし、稼がせてるからな」

その言葉に男たちは齒噛みする。

事実だったからだ。

ビクターはCGSの社長であるマルバ・アーケイが一年ほど前に3番組の教官役にと連れて来た男だった。

それまでの3番組——少年兵たちは阿頼耶識手術によるMWを自在に操る術こそ手にしたがそれ以外は殆ど訓練も受けない、主力である一番組の肉の盾でしかなかった。

或は一番組のストレス発散用の玩具であった。

それを変えたのがビクターだ。

それまでの漫然とした訓練から、カリキュラムを組んでシステム化された訓練を導入した。

効率的な訓練は3番組を絞り上げた。

同時に食事、清潔、衣服と、兵士を育てる為の投資をマルバにさせたのだ。

成長期に各種栄養をしつかりと摂る事で兵士として頑健な肉体を作らせる。

頑健であれば、どんな過酷な戦場であつても十分な能<sup>パフォーマンス</sup>力を発揮できるだろう。

清潔であれば、訓練や戦闘で怪我をしても感染症のリスクが下がるので医療費が抑えられ、トータルでの人件費の抑制に繋がる。

衣服を整えさせる事で乱雑な少年兵に規律を教え、合わせて、外部へCGSの規律正しさを見せつける事で威圧する事につながるのだ。

それらは3番組の少年兵から大いに受け入れられていた。

訓練は過酷になったが、腹一杯に喰えるしシャワーも浴びれる。

服も寝床も良くなった。

クリュセのスラム街の孤児出身者が多い3番組にとつて、まるで天国の様な扱いであつた。

同時にビクターは事ある事に次げていた。

これは少年兵たちが立派な兵に育つて金を稼ぐための投資である事—— 成果を期待されていると言う事を。

今に満足すればこそ少年兵たちは奮起し、この今を失わない為に訓練に本気に

なつて取り組んだ。

成果を上げた。

その他、ビクターは部隊の運用で効率的な金稼ぎの提案をマルバに行つた。

裸一貫で成り上がつて来たマルバは、色々な意味で学が無かつた。

感覚と体験で経営していた。

そこに理論をビクターが持ち込んだのだ。

営業から経理から総務から、適当では無く合理的な判断基準と目的の設定を提案したのだ。

それをマルバは受け入れた。

マルバの経営者としてのカンが告げたのだ。

金になる、と。

実際、金になつた。

それまで漫然としていた利益が、目に見える形になり、それが少しづつではあつても上昇していった。

上げた実績に、金の匂いが大好きなマルバはビクターを高く評価し、いつの間にかCGSの中では、一番組隊長であるハエダ・グルネンに継ぐ相談役に抜擢していた。

それが一番組の、以前からCGSに居た大人たちの大多数から良く思われていなかった

た。

遊ぶ金が手に入る様になったし、仕事も楽になったが、何となく気持ちが良くなかったのだ。

外から来た新参がデカイ顔をしていると感じるのだ。

「くそつ、覚えてやがれ！」

そんな気分の籠った捨て台詞を吐いて、男たちは立ち去った。

対する少年兵たちはやんやんやの大喝采だ。

とは言え、ビクターの顔は渋かった。

舌打ちをしたい気分だと言うべきだろう。

改めて子供三番組と大人一番組の間にある溝の根深さを感じたからだ。

CGSという会社が大きくなる為にはこのままでは良くない。

その思いがあつたからだ。

マルバやハエダともその点は話してはいたが、ハエダ自身が三番組の少年兵たちを弾除け程度にしか思つてはおらず、何ともし難いのが現実だった。

頭を搔くビクター。

出来る事は多くは無い。

その多くは無い出来る事を一つ一つこなしていくしかない、再度、肝に命じていた。「取りあえず、泣いたり笑ったり出来なくなるまで訓練だ」

ポツリと漏らした言葉に少年兵たちは顔色を変えた。

絶対に暴力を使わないビクターだが、その訓練の厳しさは一番組の大人たちの比では無かった。

生かさぬ様に殺さぬ様に搾り上げられるのだから。

まだ体が出来上がってないが故に無茶はし無いが、無理のない範囲で扱われる。

それは、ある意味で愛ゆえに。

少年兵たちを生き残らせたいと思うが故に。

「頑張ろうか？」

「はいー」

ヤケクソじみて声を上げる少年兵たち。  
それ以外に何が出来る訳では無いが為に。

トイレで鏡を睨みつけているのは、若いながらも狼の様な粗削りの鋭さをもっている男だった。

オルガ・イツカ、CGS三番組隊長だ。

緑色の戦闘作業服の右袖には、白いラインの入った指揮官を意味する肩吊腕章を付けている。

鏡越しに自分を睨んでいるのではなく、身だしなみを確認しているのだった。

髪、肌、手足、服の乱れと汚れを確認する。

この1年で嫌と言う程に言い聞かされてながら身に着けたが、完全に習慣づいた訳でも無いからこの渋顔である。

「オルガ、準備は出来た？」

ドアが開いた。

入って来たのは小柄な、だが顔に子供らしい甘さの無い若者だった。捲った袖から見える腕は、良く鍛え込まれた強靭さをみなぎらせている。

三日月・オーガス。

オルガと同じ緑色の戦闘作業服だが、裾の長いコートタイプを着込んでいる。

「お前は早いな」

「ん、オルガと違って下っ端だからね」

「ウチ三番組一番のエースが何を言ってるやがる」

「俺はオルガの武器だからね」

「ミカがいれば心強いよ、本当に」

三日月が居れば何だってできそうだと言うオルガ。

オルガが目的地を指してくれるから進めるんだと言う三日月。

拳と拳の底をぶつける。

CGS本社の中を歩いていくオルガと三日月。

向かう先は廊下の外れ、少し広くなつた場所にソファとドリンクの自動販売機を置いただけの簡易休憩所だ。

そこに仲間たちが居る。

一番の年かさでも20を超えない少年兵だけで編成された三番組、その中枢メンバーが。

2人の姿に気付いた太目の少年、愛嬌のある顔つきをしたビスケット・グリフォンが手を挙げる。

三番組できつての知性派で、オルガの参謀役でもある。

「二人とも遅いよ。みんな集まつてるよ」

「デツケエクソでも出たのかよ」

少し下品に笑うのはノルバ・シノ、三番組でも最古参の少年兵であり部隊のムード

メーカーでもある。

柔和な顔をしているが、三番組では白兵戦部隊の指揮官を担当している。

「弛んでんだよ」

やや剣のある声を上げたのはユージン・セブンスタークだ。

三番組でオルガに次ぐ立場にあり、MW二番隊の指揮官でもある。

整った顔立ちをしているが、浮かんでいる表情が影を落としている。

「気合を入れ過ぎだぜユージン」

シノがからかう。

凶星を指されたユージンは慌てて立ち上がった。

「ばっ、馬鹿野郎。俺は指名を受けたからキチンとやろってだけでだなあ」

「判ってるって、お前が責任感が強いって事はよ」

「おつ、おう。判つてりやいいんだよ、判つてりや」

漫才の様な2人の様に、三日月は無表情に言葉を洩らす。

「仲が良いよね」

「だな」

相槌を打ったオルガ。

そんな2人に、ビスケットは口の中で君たちもという言葉を弄んだ。  
帽子を脱いで、被る。

「さつ、行こうか」

三番組の参謀役、隊長であるオルガの女房役、そして何より脳筋集団の保母さん役をこなすのがビスケットという人間だった。

上品とは言い難いが上質ではある家具の揃えられたCGS社長室。

その主、CGS社長であるマルバは丸つとした顔に満面の笑みを浮かべてオルガたち3番組を紹介する。

欲に炙られた笑顔だった。

燃料は金と名誉。

地球へと送り届けるという仕事にクーデリアが示した金額はCGSにとって数か月分にも相当する売り上げであり、クーデリアが無事に地球との交渉に成功すれば火星解放の協力者としてCGSの名も挙がる。

極彩色の皮算用が燃えていた。

「指名を頂いた我がCGSの3番組は実に勇敢であり、クーデリアさんに絶対の安心を  
—」

絶好調の長広舌に、うんざりとした気分させられるクーデリアは、それを表に出さぬ様に注意しつつオルガたちを見る。

健康そうな肌艶、清潔な服装、表情にも暗さは……少ない。

表情はマルバの演説にうんざりしてだろうと理解しつつも、肌艶と服装は理解出来ない。

P M S Cなどで問題になっている、少年兵の劣悪な雇用環境がC G Sでは違うのか。その事が気になっていた。

疑問を抱けば行動する。

それがクーデリアという少女だった。

相手を問わず手段を問わぬ、そんな所のある少女だった。

だから、至極直截的に口を開いた。

「貴方は今、幸せなのですか？」

それは滞在する部屋へと案内されている時の事。

相手は、紹介された5人の中で一番背の小さな、正に少年兵という感のあつた三日月だった。

肌艶も服装も、或は演出だったのかもしれない。

表情が読み取れない三日月という少年兵は、過酷な環境ゆえに心が死んでしまっているのではないかと。

対する三日月の返答も又、直截的であった。

「何言ってるの、アンタ？」

言葉は、字面にすれば剣呑であるが、その語調は訝しむと言うよりも、正気を疑うという風であった。

言葉以上に目が、動く。

そこに浮かぶ感情は懐疑、より正確に言うならば正気を疑う色だった。

「あ、いや、お仕事とか大変じゃないのかなと思ひまして……………」

「お仕事、ね」

三日月は3番組きつての切り込み役だ。  
フロント・ロー

MWに乗ったり鉄砲担いで先陣をきる。

戦火の下を潜り、血と硝煙にまみれるのが商売だ。

ソレが大変かと聞かれれば、普通としか答えようが無い。

日常だからだ。

ソレしか知らない三日月にとって、比較など出来ないのだから。

「別に、普通なんじゃない？」

取りあえず寝床はある。

飯も食える。

特に、ビクターが教官として来てから食事の量と種類が増えた。

訓練は大変だが、それが終われば自由時間もある。

服装とか清潔とかにも煩いが、暴力が振るわれる事も減った。

夜に3番組年少班が声を殺して泣いているのに気付く事も無くなった。

そこまで考えた所で、三日月は気付いた。

「あつ」

無意識にポケットから火星椰子の実を取り出し、齧る。  
もしかしたら ——

「幸せになったのかもしれないな」

「え？」

クーデリアが怪訝な顔をするが、気にせず三日月は続ける。

「多分ね」

もう一個、火星椰子を齧る。  
その身は甘く美味しかった。

## 1—2

+

夜明け前。

夜の闇が一番に暗い時間。

火星の大地は基本的に地面がむき出しになっている。

テラ・フォーミング  
地球化によって人が命を育める場所とはなったが、その本質は地球の命を拒む大地

だからだ。

そんな荒野にギャラルホルンの主力MS、グレイズが駐機姿勢で佇んでいた。

火星に駐屯するギャラルホルン第5鎮定軍を表す暗黄緑色に塗られている。

磨き上げられた装甲は、光無き夜にあっても輝いて見える。

右肩に白文字で51の文字が記入されている。

左肩には小隊指揮官騎を意味する白線が1つ。

第51MS小隊の小隊長であるオーリス・ステンジャの機体だ。

1機だけでは無い。

その後方に2機、此方は機体を覆う隠蔽・防砂ネットが掛けられている。グレイズではない。

ゲイレールだ。

グレイズが採用される以前のギャラルホルン主力MSであり、火星の様な場所では現在も主力を担っているMSであった。

この様にゲイレール・フレーム機は更新され退役しつつあるとは言え別段に老朽化した訳でも陳腐化した訳でも無い。

MSとはその基本的な部分は300年前に完成しており、特に主<sup>エイハブ・リアクター</sup>機や構造体などは高硬度レアアロイを採用している事も相まって300年所ではない寿命を誇っている。

各部の消耗品の更新をしつかりと行いさえすれば、MSとしての運用には特に問題は発生しなかった。

にも関わらず更新が行われたのは、ゲイレールというMSのフレームの方向性の問題であった。

ゲイレールが開発された時代は、いまだ大規模な宇宙海賊がMSをもって跋扈する時代であった。

火星や金星なども襲撃を度々受ける時代だった。

であるが為、ゲイレールは対MS戦闘が重視され重装甲を前提としたフレームとして生み出されたのだ。

その時代のゲイレールは、ギャラルホルンの象徴として赫々とした輝きをもっていた。

だが現代で要求されるのは治安維持戦、対人戦闘である。

対人用の小火器を機体の各部に取り付け、それを操る広域用センサーと管制用知性体が重要になってくるのだ。

対してグレイズは、センサーの数でもゲイレールの1.5倍となっており、装甲内に各種機銃が取り付ける事も出来る様に設計されている。

その上で可動部分を減らす様に設計を行い、運用コストの低減も図った機体なのだ。

グレイズは、今、ギャラルホルンが欲する機体であった。

とは言えゲイレールも陳腐化したまままで使っている訳では無い。

主力として製造されてから1世紀、時代時代の要請に合わせて様々な改良や改造が施されてきている。

そして今、火星にあるのはシャルフリヒター刑と呼ばれる対人掃討用の重火力重装甲型を基に火星で独自の改造の行われたS M — III型である。

グレイズの騎士甲冑の様なスマートな外観と比較すれば、ゲイレールS M — IIIは武士

の大鎧の様な重厚さを見る者に感じさせる姿だった。

各部には12・7mm機銃と40mm擲弾銃が取り付けられ、それを操るセンサー類も増設されている。

事、能力としてグレイズに劣らぬものであった。

合わせて3機のMS。

他に新鋭の重大型戦闘用MWが13両、120mm迫撃砲を搭載した火力支援車も5両、そして4両の装輪歩兵戦闘車だ。

トラックも多数、停まっている。

歩兵として第551機械化歩兵中隊から抽出した人員で編制された1個増強小隊が居る。

これが第5鎮定軍第1遊撃隊、コーラル・コンラッドの私兵集団だった。

多くの将兵が最後の戦闘準備を進める中、MSの足元に設けられたテントの中で、オーリスが胸を張って下知をする。

「克蘭ク、貴様らは予備だ。でしやばるなよ?」

対するのは壮年と青年、2人のギャラルホルン士官であった。

共に胸元にはMS乗りを意味する徽章を下げている。ゲイレールのパイロットだ。

「はい、判っております。オーリス一尉の指示があるまではこの場から我々は動きませ  
ん」

壮年の、鍛え上げられた巖の如き風貌をしたクランク・ゼント二尉は腰を曲げる。

「素直で結構」

クランクの後ろに立つ青年、アイン・ダルトン三尉は直立不動だ。

士官学校を出たばかりのアインにとって、これが初の実戦であったが為、緊張をして  
いるのだった。

その顔を見たオーリスは、小さく笑った。

「コーラル閣下のご厚意。アインの初陣であるが、この程度の相手にMSを複数も出し  
たとなれば第一遊撃隊の兵の士気にも関わるからな」

戦場の空気を味わうだけで我慢しろ、とオーリスは笑った。

そこには親しみの色すらあつた。

感動して更に背筋を伸ばすアイン。

地球出身の父と火星人の母を持つアインは、ギャラルホルンではハズレ者扱いだつた。

被差別の立場にありながらもMS操縦の才能を見だされ、貴重なMSの操縦師の枠を得たアインは、そうであるが故に火星支部でも孤立気味であつた。

ザンブラッド純血では無いにも関わらず、操縦師としての特権が与えられているからである。

にも関わらず、オーリスはアインに目を掛けていた。

ギャラルホルン・ノーブル名家出身の人間らしい地球出身者偏重主義の徒であるオーリスであつたが、同時に、こんな辺鄙な火星へと志願して来るだけあつて、変人である——基地内ではそう噂されるほどであつた。

「有難くあります。オーリス一尉の雄姿をこちらから見させて頂きます」

或は、素直なアインの称賛が心地良いだけかもしれないが。

音も無くCGS基地へと近づくと、ギャラルホルン第1遊撃部隊。  
強化服を着込んだ戦闘工兵部隊が切っ先となっていく。

CGS側も有事に備えたセンサーなどで哨戒線を構築していたが、最高級最新鋭の装備を持った連中に全力で仕掛けられては、どうにもならなかった。

と、その象を思わせる足が止まった。

視線の先、センサーが歩哨に立つ少年兵たちを捉えたのだ。

手には銃を持ち、周囲を伺っている。

油断の気配は無い。

誤魔化しての突破は困難であると判断した尖兵は、後方とのレーザー通信で排除を依頼する。

200m程後方で最新鋭の隠蔽ネットに隠れていた射手が、誘導に従って12.7mm狙撃銃を操る。

暗視カメラ越しに、2人の少年を捉える。

ヘルメットは被つていなのでむき出しとなっている頭部に照準を合わせる。呼吸を整えて、少年たちの動きを<sup>リズム</sup>図る。

合わせる。

数秒、合った。

その瞬間、ためらいも無く射手は引き金を引いた。

消音機によつて小さくなった発砲音が響いた。

1度。

少しだけ筒先を動かして撃つ。

「クリア」

赤い華が咲く。

緊張からか、常日頃よりもかなり早い時間に起きたクーデリアであったが、ベットから起きることなく何となく布団に包まっていた。

火星を出る事。

地球へ行く事。

貧困、資源、経済、混乱 —— そして少年兵。

「三日月・オーガスと言いましたね」

独白と共に昼間あつた特徴的な少年兵を思い出す。

醒めた、あの目を。

手を伸ばした事を、拒否された事を。

手をさし伸ばしたとか救いの手を、などと傲慢な事を言う積りは無かつた。

だが、地球へと向かう際に世話になるからと友好の為に伸ばした手は、相手にもされなかつた。

『何で？』

心底から意味が分からないという顔をしていた。

それが、クーデリアの心に刺さつた。

自分では傲慢な気持ちは無かったが、それは果たして他人から見ても謙虚な態度と見えたであろうか、と。

革命の乙女などという過大なあだ名を与えられ、大人たちから誉めそやされ、心のどこかで傲慢になつてはいなかつたか、と。

唐突に、サイレンが鳴つた。

耳をつんざく音に、慌てて周りを見る。

「!？」

振動。

身体を竦める。

「お嬢様」

振り返れば、彼女に最も忠実な従者が簡素な部屋着にコートを着て立っていた。髪は少し乱れているが、そこは寝起きのご愛敬だ。

寸鉄帯びぬ身ではあつたが、その心根と覚悟は武装をしているが如くであつた。

「確認してまいりますので、ここでお待ちください」

「フミタン」

と、その時であった。

「すいませんっ！」

扉が叩かれたのは。

やってきたのはビスケットだった。

三番組で一番に柔らかな雰囲気があり丁寧語が使える、同時に頭の回る為にこんな役割メッセンジャーを良く担当していた。

「襲撃です。何者かに基地が襲われていますが対応しています」

念の為に2人には基地の地下へと避難する様にビスケットはつづけた。

厄災戦時代に作られたCGS本社構造物は、戦乱に耐えられる様にと動力炉や管制設備、機械室などの重要な区画は殆どが地下にあつた。

築300年を超える建物。

流石にMSの構造物にも使われるような高硬度レアアロイで出来ている訳では無かつたが、適切な補修が行われている事と火星という特殊な環境故にコンクリートの劣化が余り進んではおらず、堅牢なのだ。

非常灯の点いた廊下を案内しながら地下へ地下へと降りていく。  
段々と爆発音も射撃音も聞こえなくなっていく。

「厄災戦時代の軍事拠点ですからね、衛星軌道爆撃を食らってもここなら大丈夫ですよ」

薄明りの中で見上げるコンクリート打ちっぱなしの壁。

壁際に放置された雑多な荷物に積もった汚れが、この施設の歴史を感じさせる。

珍し気にそれを見上げるクーデリア。

「ここは何の場所なんですか？」

「地下格納庫なのかな？ この階層は深いからあまり使って無いけどMS整備用の設備が残ってるって聞いた事がありますから」

倉庫代わりになっているというビスケット。

そしてもう一つ、この基地の動力炉があるのだとも。

「そうですか……………」

非常灯だけが照らしていた廊下の先、大きな扉が内側からの光で目立って見えた。

「あそこです。あそこが動力炉とその管理室があるんです。そこなら人がゆつくりできる設備があります。後、動力炉には少しびっくりすると思いますよ」

「まあー！」

声を上げたクーデリア。

そこには1機のMSが鎮座していた。

白を基調にしたMSは油と埃にまみれてはいたが、確かな力強さがあった。

身体の各部に太いケーブルが這っている姿は、囚われの武将染みた風格すらあった。

「グレイズ？ それともゲイレールですか？」

MSと言えば、とTVに写るギヤラルホルンを象徴するMSの名を挙げれば、ビスケットは笑った。

「ギヤラルホルンの？ まさか。これは社長がつけて来た奴です。厄災戦の頃のMSじゃないかって言われてます」

「お来たか」

金属的な足音を立てて、休憩所から浅黒い肌をした厳つい男が出て来た。

濃緑のオーバーオールに黄色い戦闘作業着を羽織っている。

ナデイ・雪之丞・カツサパ、CGSでMWを中心にした機材整備の責任者をやってい

る男だった。

表情に緊張感がある。

恨み恨まれるのがP M C Sの常とは言え、このC G Sの基地に襲撃を掛けて来られたのは初めてなのだ。

緊張しているのも当然であった。

「年少組はコッチへの避難は終わった。哨戒に出てた奴ら以外は点呼は終わってる。全員いるぞ」

C G Sの大人の中では例外的な、教官のビクターと並んで三番組の子供たちに優しい人間だった為、急場などでは年少の少年たちの引率者の様な真似事までしていた。

「有難うございます。こちらは昨日、ここに来たお客様のクーデリアさんとフミタンさんです」

「話は聞いている。地球に行く別嬪さんたちだな。俺はナデイ・雪之丞・カツサパだ。この会社で整備をやってる」

「あ、クーデリア・藍那・バーンスタインですよろしくお願いします。こちらはフミタン・アドモスです」

挨拶。

それが終わるのを焦れた様に、ビスケットは動く。

「じゃ僕は上に戻りますんでクーデリアさん達をお願いします」

「おお判った。気を付けてな」

「はい！」

駆け出していくビスケット。

太いながらも筋肉を持った人間独特の、妙なまでの素早さがあった。

その背中を一瞥した雪之丞は、それから相好を崩してクーデリアを見た。スマイルスマイル。

安心させるように笑う。

暗い場所で大人の男と居ると言うのが女性にストレスを与えると理解しての行動だ。ガサツに見える雪之丞は、その実、女性に対しては実にスマートな感性を持っている部分があった。

「ここは暗いし、少しばかり臭いかもしれんが安全な場所だお嬢さん。代用だが珈琲もある。ゆつくりと過ごしてくれ。子供たちが煩いかもしれんがな」

「煩いはヒデエよおやつさん！」

大柄な雪之丞の身体からひよっこりとまだあどけない少年兵が顔を出した。

唇を尖らせている。

その頭を乱暴に撫でる雪之丞。

「悪い悪い。じゃあお詫びにお前の珈琲には砂糖をたっぷり入れてやるよ」

「やったあ！ 嘘は駄目だぜ、おやつさん!!」

「約束だ」

歩き出した2人の姿と会話に何となく笑ったクーデリアは、一度だけ巨大なMSを見上げてからその背中を追って歩き出す。

少しづつ明けてくる空。

雲の少ない青みの強い空は火星特有だ。

空の下、オルガは癖の左目を閉じながら戦場を睨む。

現在、戦闘は膠着状態にある。

散発的な撃ち合いは続いているが、敵は無理矢理に押し込んでこない。

オルガたち三番組も無理には前に出ない。

掘ったタコツボに籠ったり、遮蔽壁に隠れたりしながら撃ち返している。

飛び出すのをよく耐えて辛抱強く戦っている。

お蔭で、撃ち合いが始まってから2時間近くが経過しているが、けが人は兎も角、死者は少なかつた。

運の悪い、迫撃砲の直撃を受けた塹壕以外は、敵の攻撃をよく耐えられているのだ。教官であるビクターの教えを忠実に守っていたのだ。

戦場で飛び出す奴は馬鹿自殺志願者だ。味方の邪魔だ。そんな奴は訓練で俺が殺す—— そう言つて扱かれた三番組の少年兵は、ベテランの傭兵並みにしぶとく、陰湿な戦い方を身に着けていた。

であればこそ生まれた膠着状態。

「だが狙いが判らねえ」

戦場の全体が見える場所に置いた指揮用のMWに搭乗したオルガは首を傾げる。

商売敵の嫌がらせなら、それこそ2〜3発撃つてからこれみよがしに戦力を誇示して退くものだと聞いていた。

腰を据えての撃ち合いなんてやって被害を出したくないのはどこも同じであると。

後、派手な撃ち合いをすると、治安維持にとギャラルホルンが出張つて来る。

事後処理が面倒くさいので来ない様に短時間で終わらせるのも流儀だとは聞いていた。

「オルガ！」

「ビスケットか、悪いな手間を掛けさせた」

「スポンサーは大事にしないと駄目だからね。それより状況は？　一番組は何をしているの？」

三番組よりも良い装備、良いMWを与えられている一番組であったが、この場には1台のMWどころか1人として居なかった。

「後方で戦闘準備中、俺らは時間を稼げとよ」

「……………あいつら」

「例の奴、まだ大丈夫だよな？」

「大丈夫だ。発見されて怒られたって話は聞かない。後、スイッチはここにある」

ポケットを触って確認するビスケット。

オルガは楽しそうに頷く。

「朗報だ、今の所は一番のな」

と、オルガのMWの通信機が鳴った。

機体の操縦手であるユージンが取る。

声を上げる。

「オルガ、教官だ！」

「おう」

ネットクのスイッチを切り替える。

三番組部隊用から直接通信に。

一瞬のノイズ。

音がクリアになる。

戦闘中は一緒に居るところか滅多な事では連絡してこないビクター。

薄情な訳では無い。

オルガの指揮権と指揮官としての権威を尊重するが故に、万が一にも指揮系統が混乱しないようにとの配慮だった。

そのビクターが動いた事に、何らかの嫌な予感を感じる。

「どうした教官、何処に居るんだ？」

声が震えて無かった事に安堵しつつオルガは耳を澄ます。

『ああ、管制塔に登っててな、敵が良く見えるぞ』

「危ないぜ、狙われる」

『既にガラスは全部やられたよ。ま、俺は死ぬ予定が無いんで無事だがな。そんな事より悪い報告と凄く悪い報告がある。どっちから聞きたい?』

「良い話はないのかよ、少しでもマシな方から頼むわ」

『良いぜ、敵の正体が判った。MWのステンシル………ギヤラルホルンだ』

七星重工製の最新大型軍用モデルだと言う。

何よりラツパギヤラルホルン章のマークが車体に書き込まれているのだ。

間違える筈も無かった。

「マジかよ。最悪中の最悪じゃねえか。それより悪い報告何て想像も出来ないぞ」

悪態をつくオルガ。

だが通信機の向こう側、ビクターの声には遊びは無かった。

## 『MSが居る』

極めつけの凶報に、オルガは思わず車体のハッチを殴っていた。

「何でギヤラルホルンがウチみたいな所に来るんだよっ!？」

悲鳴を愚痴とを洩らしながら、逃げ支度を進めていくマルバ。

パンパンに膨れ上がったバックに更に詰め込んでいく。

ギヤラルホルンが敵となれば銀行口座も封じられる可能性があるので、現金と貴金属とが生命線になるからだ。

必死にもなろうと言うものであった。

社長室に駆け込んでくる男、ササイ・ヤンカス。

マルバの腰巾着みたいなのをしている。

とは言え、急場でもマルバを見捨てない辺り、忠誠心はそれなりに持っていた。

「社長、準備できましたか!？」

「まだだ、あと少し」

隠し金庫を開けようとして悪戦苦闘をマルバに、ササイは泣き付く。

「勘弁して下さいよ社長！ 命あつての物種ですつて!!」

三番組が抵抗しているが、何時、ギャラルホルンが基地まで突入してくるか判らない。基地が包囲されるかもしれない。

今は一方方向からの攻撃なので、今のうちにギャラルホルンが居ない方向から逃げ出したい。

それが、ササイの、一番組の大人たちの総意だった。

三番組には、一番組が別方向バックプロウハンドからの一撃を決めるまでの持久を命じていたが、その実として肉壁として一番組が安全な場所へと逃れる為の時間稼ぎが目的だった。

「くそつ、ワシは、ワシはこんな所では終わらんぞ!!」

不屈の決意と金、そしてササイと共にマルバは駆け出す。

M Sのコクピット内で戦況を見守っているオーリス。

だが、状況が良い訳では無い。

眼前のM W部隊の攻勢は、ほぼ頓挫している。

120mm迫撃砲の支援を受けて尚、M W部隊は敵M W部隊の堅守を押し切る事が出来ずにいるのだ。

よくよく計算されて作られたCGS —— 三番組が作り上げた塹壕とM W退避壕は、ギャラルホルン第1遊撃隊の猛攻に粘り強く耐えていた。

多分に、この様な僻地で真つ当な野戦築城に出会うとは思わなかったが故のギャラルホルン側の慢心と準備不足もあった。

三番組が見事であれば、対する第1遊撃隊は不甲斐ないと評する事が出来る。だが、オーリスの表情に陰りは無かった。

M W戦で多少抵抗出来たとしても、此方は困なのだ。

派手な砲撃戦をするM W部隊は敵の耳目を惹きつける為の助攻であり、本命は迂回浸透でCGS施設内へと流し込む機械化歩兵部隊なのだから。

先にクーデリアを確保し、その後、機械仕掛けの戦場神グレイズによつてCGSの哀れな傭兵もどきを蹂躪する——それがオーリスの作戦であつた。

と、その本命である筈の機械化歩兵部隊の浸攻ルートで信号弾が上がつた。

「なつ、何があつた!？」

青空に上がった赤い信号弾。

そのコントラストに目を細めるオルガ。

慌ててビケットを見る。

ビケットも慌てた様に首を振つた。

その意味する所は、まだやってない。

仕掛けはしていた。

万が一に一番組が逃げ出した日には、（？） 厩代わりにしてやろうと彼らのMWに細工をしていたビケットだが、まだその装置は使っていなかった。

「何だつてんだ」

奇しくもそれは、オーリスと同種の眩きだった。

彼我の指揮官が困惑したのとは別に、戦闘は一気に加速しだす。

浸透、奇襲を予定していた第1遊撃隊の機械化歩兵指揮官は、逃げ出した一番組との出合い頭の戦闘が勃発すると同時に、作戦を強襲へと変更。

オールウェポンズ・フリー  
全火力使用許可を宣言すると共に、一挙に攻勢に出た。

短時間で粉碎し、突破しようというのだ。

一番組を低練度のP M S Cと侮つての事であつたが、それが裏目に出る。

余りに勢いよく撃ち込んでくる第1遊撃隊に、一番組は逃げ場を奪われた——包  
圍殲滅をされるのではとパニックを起こし徹底抗戦を開始してしまったのだ。

機械化歩兵部隊とM W部隊が何の細工も無しにぶつかるといふ余りにも力技の戦闘。

両者の指揮官はほぼ同じタイミングで、増援を求めた。

『M W部隊を全部コッチに回せ、火力が足りねえ』

通信機越しに、焦つた声で急いで支援に来いと言うハエダ。

逃げ出そうとしていた事などおくびにも出さぬその物言いに、内心で大いにキレなが

らもオルガは回せる部隊の抽出を考える。

ハエダの一番組が壊滅し、突破されてはオルガたちも挟撃される事になるからだ。

「急いで1班を回しますんで、それまで耐えてて下さい」

『MW隊、全部コッチに寄越せ、命令だ』

「無茶言わんで下さい。それじゃコッチが即座に突破されつちまいますよ」

そもそも、三番組とて楽な戦場に居る訳では無いのだ。

火力の熾烈な応酬をしている最中なのだ、退避壕に籠っているMWが転用しようとしたら即座に撃破されかねない戦況であった。

『何でも良いから急げ、俺らが死んじま——』

そこでプツリと通信が切れた。

ハエダの指揮MWが撃破されたのか、機材の破損か、通信妨害か。

何れにせよ、戦況が悪いのだけは判った。

「ふざけやがって」

何が、と言う訳では無い。

何もかもがだった。

いきなり仕掛けて来るギャラルホルンも、逃げ出す一番組も、戦況も、MSも、何もかもがふざけていた。

とは言え、現実を無視し得たのは、贅沢が出来たのはこの一言の時間だけ。

オルガは三番組の命を預かる人間として、脳みそを絞る。

「どうするオルガ？」

参謀役のビスケットが顔を顰めている。

現状維持をするのもギリギリな戦力なのだ。

それだけの戦力差があった。

「裏をかかれちゃ、コッチもやりきれねえ……さつき補給に下がった昭弘の隊に行ってもらう」

「昭弘の隊だと……」

言葉を濁すビスケット。

昭弘の隊とは、昭弘・アルトランドの指揮する7機のMW部隊だった。

昭弘はMW乗りとしての腕は良い。

三番組では三日月に次ぐ、エースであり、又、部隊の指揮官としても安定したものを持っていたし、隊の隊員も精鋭だった。

その意味では増援に回すのにうってつけであつたが、1つだけ問題があつた。

彼らが、昭弘を含めて全員が左側に赤いラインの入った濃緑の戦闘作業着を着ているという事。

即ち、ヒューマン<sup>奴隷階級</sup>テブリだという事が。

宇宙海賊などに攫われ、小さい頃から戦場に放り込まれ、使い潰されて行く哀れな戦争<sup>ヒューマンテブリ</sup>奴隷。

CGSに來たのも、マルバが戦闘<sup>阿頼耶識</sup>要員として買い込んだ結果だった。

とは言え、別にオルガもビスケットも昭弘達をそんな目で見た事は無かった。

同じ釜の飯を食い、同じようにビクターに扱かれ、同じように戦場で闘う仲間であると思っていた。

だが、一番組は違う。

一番組の大人たちは奴隷として扱う。

この戦闘でも状況が悪化したら盾として使われる可能性が高い。

その事をビスケットは危惧していた。

「だがよビスケット」

『仕方が無えだろ。この戦況じゃな』

さび色の声が混ざる。

昭弘だ。

『何、一番組の連中の為に死んでやる積りはねえから安心して任せろ』

「すまねえ」

『辛気臭えのは無しだぜ、組長』

「ああ。腕のいいお前らに任せる。死ぬんじやねえぞ」

『努力はする、期待している』

オルガの切ったカード<sup>増援</sup>。

対するオーリスは鬼札<sup>エース</sup>を切る。

『オルガ、MSが動いた』

ビクターからの報告。

平地に居るオルガの双眼鏡にも、オーリスのグレイズが見えた。  
前に来る。

「マジかよ」

## 1—3

十  
人型機動兵器<sup>M S</sup>。

それは戦場の支配者であり、絶対的な王者だ。

敵にMSが居る事をビクターから知らされたオルガは、自分達が扱う機動戦闘車<sup>M W</sup>では絶対に勝てないという現実から逃げず、1つの決断を下していた。

目には目を歯には歯を、MSにはMSを。

CGS本社の動力源にされているMSを動かそうと言うのだ。

一番組のハエダにも社長のマルバにも相談も報告もしていない、オルガの独断だ。

終わった後でどうなるか、懲罰を受けるか或は会社から追放されるか判らぬが、動かさなければ死ぬだけだと言うのがオルガの直感であった。

「頼むぜ、ミカア」

起死回生の切り札を託した、自他ともに認める相棒の名をオルガは呟いた。

CGS本社施設の地下に設けられた動力炉では、その動力源たるMSの発進準備が進められていた。

とは言えこのMSは主機エイハブ・リアクターこそ手は入れられていたが、それ以外は何十年か何百年か放置されていた様な機体だ。

簡単に行く筈も無い。

その事を歯がゆく思いながら、雪之丞はMSの出撃準備を行っていた。

機体各部の固定を排除し、各部を確認する。

そして、大事な事を行う。

操縦槽コックピットの設置だ。

マルバが発見したこのMSは、その時点で操縦に必要な操縦槽コックピット回りの設備が存在して  
いなかったのだ。

故に、応急処置としてMW——この場に三日月が乗ってきた白い機体を解体し、その操縦席周りを移設したのだ。

「無理矢理だが、何とかかなりそうだな」

無理矢理に取り付けたモニターに、MSの頭センサー／カメラ部からの情報が表示されると共に、雪之丞も安堵の溜息を洩らした。

MSやMWに使われる設備の規格は人類の科学力の絶頂期——厄災戦の前の時代に策定されたものが今まで変更されず使われてきている為、雪之丞の技術者としての部分が接続が出来るだろうと判断してはいたが、とは言え実際に接続に成功すれば人間として安堵すると言うものであった。

操縦桿やペダルの取り付けは終わっている。

後は、操縦席——阿頼耶識システム接続部の設置であった。

「行けそうか？」

「何とか」

雪之丞の問いかけに言葉少なげに答えるのは少女の様に線の細い少年、CGS整備班のヤマギ・ギルマトンだ。

身体の弱さから戦闘部隊から整備班に転属になった少年兵であり、その経緯から必死

になってMWを勉強し、今では阿頼耶識システム回りなどでは雪之丞が自分よりも理解していると認めている整備兵<sup>メカニック</sup>であった。

「阿頼耶識システム、情報伝達回りも劣化してないから接続できるよ」

「よし、ならとつとと組み付けちまおう」

クレーンで釣り上げた阿頼耶識のシステム回りを接続していく2人。

その姿を三日月は、近くの通<sup>キャットウオーク</sup>路から緊張感も無く眺めていた。

時々、火星椰子を齧っている。

「怖くはないのですか？」

「ん？」

クーデリアだった。

うつむき加減のままに、三日月に問いかける。

「怖い？」

「MSに乗る事も、MSと戦う事も、こんな状況に置かれた事も」

敵はギャラルホルン。

その事を知った時、クーデリアはこの戦いが自分の為に引き起こされたのだと理解した。

自分が巻き込んだのだと。

だからこそ、CGSに、今命を張っているオルガ達や死地に飛び込む三日月に対して悔恨の念を抱いていた。

だが、シリアスなクーデリアに対して三日月は緊張感を見せなかった。

「仕事だしね」

今までも、今も、そして明日も。

自分の仕事は鉄火場で命を張る事だと了解している三日月にとって、今の状況であつ

てもクーデリアの様に重く思う所は無かったのだ。

その三日月の姿に、クーデリアは少年兵の生き様と言うものを骨身に沁みるのだった。

「……………」

言葉が出なかった。

だが、自分が命を掛けさせるのだ。

何かを言わねばならない。

だが、言葉が出ない。

ノアキスの七月会議では雄弁なる小淑女等と持て囃されてもこれが私の実相であるかを唇をかみしめた。

小さくなっているクーデリアに、一瞥する三日月。

何かを言うべきかと少し悩んだ。

「三日月、来てくれ！」

雪之丞に呼ばれて、何もクーデリアに話す事無く三日月はMSへと向かった。

展開した胸部装甲の奥。

無理矢理に取り付けられたモニターや操縦桿を避ける様に、身を振って操縦席に座る三日月。

むき出しになった襟首の阿頼耶識に、雪之丞は阿頼耶識システムのジョイント部を当てる。

雪之丞の顔には緊張感がある。

「覚悟は良いか？」

「大丈夫、とつととやって。オルガ達が心配だから」

「自分の事も心配しろ」

同じ阿頼耶識システムを使うとは言え、MSのソレはMWとはけた違いの情報を機体とやり取りするのだ。

しかも、少なくとも300年は動かしていないシステムだ。

技術者として雪之丞が心配するのも当然だった。

とは言え状況に余裕はない。

そして、接続しないと云う選択肢も無い。

「接続、行くぞ」

繋げた。

その瞬間、三日月が跳ねた。

「おっ、おい、三日月い!？」

「おやつさん!？」

雪之丞もヤマギも大いに慌て、三日月に手を伸ばす。

だから気付かなかった。

MSの頭部に、その目に光が点った事を。

機体情報を表示している接触式センサー・モニターパネルに文字が浮かび、一気に流れていく。

「おやっさん、コレって……」

「ああ、自己診断プログラムか何かだな。噂に聞くMSの管制用知性体アーティフィシャルインテリジェンスって奴が目覚めたんだな」

機体概略図が表示され、殆どが黄色機能低下か赤機能喪失で染められていく。

操縦者を支援し、機体を制御する管制用知性体アーティフィシャルインテリジェンスが稼働したと言う事はMSが目覚めたと言う事であった。

と、接触式パネルの文字スクロールが止まった。

点滅するGANDAMガンダムASW|G|08バトス Ready稼働準備完了の文字。

「コイツあ……」

「……バルバトス……」

うつむき加減だった三日月が言葉と共に顔を起こす。

「おい、大丈夫なのか三日月？」

流れ出た鼻血を拭い、答える。

「うん、行ける。コイツも動けるって言ってる」

接触式パネルを触る三日月。

字の読めない三日月であったが、何故か表示されている文字の意味が判った。聞こえて来るなにか、或は声に導かれる様に、MSへの指示を下す。

機体の安全装置を解除し、エイム・リアクター主機の出力を戦闘出力へと移行させる。

「おやっさん、上から。もう上は持たないって」

通信機を片手にヤマギが声を上げる。

「三日月？」

「聞こえてる。ああ、行くよ」

「頼むぜ」

雪之丞が機体の傍から離れると共に、三日月は操縦槽コックピットのハッチを閉め、胸部装甲を正位置に固定させた。

ゆつくりと立ち上がるMS —— ガンダム・バルバドス。

その姿に、クーデリアは威容を感じた。

「い）無事で」

それは願いであった。

希望でもあった。

と、地下に避難して来ていた年少組も何時の間にかやってきており、出撃するその背に歓声と共に手を振っていた。

三番組との戦闘は、オーリスにとって正しく蹂躪であつた。

歩兵やMWが雑多な火力で抵抗を試みて来るが、グレイズには届かない。

人やMWが使用できる程度の小口径銃でMSの装甲を傷つける事は出来ず、かといつて対装甲用ロケットの類は管<sup>アーティフィシャル</sup>制<sup>インテリジエンス</sup>用<sup>知</sup>性<sup>体</sup>に制御された12.7mmの近接防<sup>C</sup>御<sup>I</sup>火<sup>W</sup>器<sup>S</sup>よつて悉くが撃ち落とせていた。

その様は正に戦場の支配者であつた。

とは言えオーリスは一気に三番組を突破しようとはしていない。

ゆっくりと大地を踏みしめる様に歩いていく。

「無様な火星人、正にゴミのようだ！」

機嫌良さそうに笑う。

必死になつて行われる抵抗が、心地よかつたのだ。

これがオーリスが火星に居る理由、第1遊撃隊に参加する理由であつた。

陣地に籠り必死になつて抵抗する三番組の姿は、火星の備<sup>P</sup>兵<sup>M</sup>では珍しく実に健<sup>C</sup>気<sup>S</sup>で、

オーリスの琴線に触れるものだった。

その健気さにオーリスは全力で応じる。

MWを踏みつぶし、逃げ惑う歩兵の背中へ対人火器を容赦なく振りまく。

誰一人として生かしてはおかぬと言う、愉悦。

「もつと抵抗してみせろおお!!」

その時、グレイズのセンサーが異常を察知した。

地表での異常振動、振動接近中の表示。

その意味をオーリスが察知する前に、唐突にグレイズの正面に土煙が上がった。

「っ!?!」

反射的に操縦ペダルを蹴っ飛ばし、回避行動を取らせるオーリス。

だが土煙は生きているかの如くグレイズに迫る。

否、土煙では無い。

土煙を裂いて、薄汚れた白いMS —— ガンダム・バルバトスが姿を現す。

「なにいい!?!」

MSの突然の登場に、混乱しつつオーリスは管制用知性体アイティフィシャルインテリジエンス 表示/提案されるに言われるままに迎撃を選択する。

操縦桿の引き金を引き、機体各部の機銃を発砲する。

「おおっ!?!」

12.7mmと言う豆鉄砲は、ガンダム・バルバトスの表面を焦がすだけ。

その勢いを止める事が出来る筈も無い。

MSの装甲にそんなものが効く筈がないのだ。

選択ミス。

対MS戦よりも対人戦闘向けに調整された管制用知性体アイティフィシャルインテリジエンスを積んだグレイズ故の、失敗であった。

とは言え、オーリスとて無能では無い。

ほんの数秒でその事を理解し、装備してきていた対MS戦にも使える武器での迎撃を

決断する。

近接戦闘用のバトルアックスだ。

身体を滾らせるアドレナリンが、オーリスに退くと言う事を許さなかったのだ。

そこにはガンダム・バルバトスの外見が余りにもみすばらしい——フルーム保護用1 次装甲が

殆どで、頭部や胸部など限られた部分しか2 次装甲が残っていない事もあった。

オーリスの見る所、ガンダム・バルバトスは廃棄寸前の老朽機でしかなかった。

即ち、簡単に撃墜撃の取れる相手にしか見えなかったのだ。

それが致命的な誤りとなる。

『オーリス一尉!』

「クラック、要らぬ世話よ!」

覇気溢れる声で笑うオーリス。

推進機を止めて機体を接地させ、迎撃を選択する。

振りかぶったバトルアックスは、更にその上から振り下ろされた大型メイスによって弾かれた。

大型メイスはそのままグレイスを潰す。

左肩側から入ったメイスは、グレイスの頭部と胸部は前衛芸術の様な形へと強制的に変容させる。

大地へと力なく沈むグレイスに、クランクは直ぐに反応できなかつた。

「馬鹿な」

高硬度レアアロイで構成されているMSのフレームがあんなにも簡単にとの驚愕であつた。

MS乗りとして戦歴を重ねているクランクではあつたが、その戦歴は精々が小競り合いが殆どの海賊退治程度であり、本格的な対MS戦の経験が少なかつた事が、その驚きに繋がっていた。

『オーリス一尉?! おのれ、不逞のMSめ!!』

が、アインの激高に、呆けている場合では無いと心機一転させる。

操縦桿を握り直して叫ぶ。

「アイン！ 私が奴の相手をする。お前は511オーリス機を救助しろ」

『はいっ!!』

クランクは管制用知性体のモードを対人から対MSへと変更させると、推進機を盛大に吹かして後方から一気に前へと飛ぶ。

三日月のMSが前に出た事で、ギャラルホルンの圧力が下がった事を察知したオルガは、急いで防衛ラインの再編成を指示した。

前線の塹壕を放棄し、人もMWもCGS本社施設直前の最終防衛ラインへの後退である。

「死んだ奴は仕方がねえ、だが生きてる奴は絶対に置いていくなよ!!」

声を張り上げて命令を出すオルガ。

今のうちにと言うオルガであったが、そのMWを操るユージンが報告を上げる。

「オルガ、まだ来る。連中、何機持ち込んでやがるんだよ!？」

MS、クランク機だ。

少し遅れてアイン機も続いている。

「おいミカ、まだやれるか？」

『やるよ。やるしかないんでしょ。前に出るからその隙に皆を下げて』

「すまねえ —— 任せるぜ」

『任された』

前に出るガンダム・バルバトス。

その雄姿を眺めるといふ贅沢をせず、オルガは三番組に指示を出す。

「急げ急げ、MS戦に巻き込まれたら死ぬぞ。死ぬ気で撤退しろ!!」

それから通信機を管制塔のビクターに繋ぐ。

「教官、聞こえるか？」

『ああ、まだ管制塔だ。どうした？』

「まだMSは見えるか？」

『いや、居ないな』

全周、今姿を見せている奴ら以外に動きは無いと言うビクター。

その声に動揺などは無い。

お蔭で一つ、オルガは安堵の溜息を洩らした。

「そいつは何よりの朗報だ。後、一番組の方はどうなってる？」

『ワチャクチャだ。手荒い乱戦になってる。昭弘の隊も近づききれてない』

「押し込まれてないなら良いさ」

『良い判断だ』

雑談をし、そして最後にオルガは本音を漏らした。

言いたかった。

或は零したかったのだ、不安を。

「なあ教官、ミカは勝てるかな」

『……………信じてやれ。今はそれしか出来ないんだ』

「そうだよな、すまねえ」

『気にするな』

オルガの心境を察していたビクターは、珍しい位に優しい声を出していた。それは年長者ベテランの気遣いでもあった。

接近して来る2機のMS。

だがガンダム・バルバトスの管制用アーティフィシャルインテリジェンス知性体は、2機を別の分類に入れた。

クランク機は要警戒レッド、アイン機は警戒イエローと。

ガンダム・バルバトスが積み上げて来た戦闘経験が、2機の挙動の差から目的を察知させたのだ。

同時に、接触式パネルに赤い文字で警告が出される。

オーリス機との戦闘機動で各部のセンサーが機体各部の異常を察知して報告していた。

そして推進剤の残量の少なさ——連続噴射推進可能時間が10分を切っていると言う警告であった。

「それでも戦わないって選択肢は無いから」

機体に答える様に呟く三日月。

その視線は、接近して来る2機を睨み続けている。

と鼻の違和感、再び溢れた鼻血を何事でも無いかの如く拭う。

阿頼耶識システムを介して三日月の脳に転写された情報は、MWとはけた違いの精度と密度であり、少なからぬ負荷を与えていたのだ。

頭痛や吐き気が三日月を襲う。

とは言え、そのお蔭でガンダム・バルバトスを操れる様になったのだ。

文句を言える話では無いと割り切っていた。

操縦桿を握り直し、狙いを定める。

狙うはアイン機。

牽制に機銃を撃ちながら突っ込んで来る。

管制用知性体の機動予測が足元——オーリス機を狙っていると示しているのだ。

目的は救援だろうと判断する。

であれば、そこに届いた瞬間に殴りつければ潰せると読んだのだ。

残り少ない推進剤を吹かして、低く横に飛ぶ。

クランク機の跳躍突進を躲し、オーリス機を軸にして90度以上回る。

撤退中のギャラルホルンのMW部隊を背にした。

流れ弾がMW隊を襲う前に、MWの敵味方識別装置の信号を確認したアイン機の管制用知性体が誤射危険を宣言、射撃を中止させた。

「こうすれば撃てないだろ」

『モビルワーカーを盾にするとはい怯だぞ、貴様ア!!』

酔狂な事に外部マイクを入れて叫ぶ敵機に、三日月は唾棄する様に呟く。

どの口が、と。

散々にMSで三番組のMWを蹂躪し、多くの人間を殺した連中が何を寝言を言うのか

と。

先ず殺してやる。

殺意を言葉にせぬままに、機体を操る。

突進。

最後に残つてた推進剤を盛大に噴射し、地を這うように一気に迫る。投射。

大型メイスを投げさせた。

『武器を捨ててっ!?!』

棒立ちのままに、大型メイスを弾いたアイン機。

反応速度は悪くない。

だが、その余りに稚拙な動きに、三日月は相手が新兵であると当たりを付けた。

最初にコイツを狙った事が間違いでは無かったと確認した。

戦場では弱い奴から潰していく。

慈悲は不要。

潰す事で彼<sup>シ</sup>の兵力差<sup>ッ</sup>を揺らし、より戦鬪を楽に進めろとビクターが教えたのだ。

勝つ為の、生き残る為の教えを三日月は忠実に守る。

最後の推進剤を振り絞ってガンダム・バルバトスは飛ぶ。

飛んで、弾かれた大型メイスを掴む。

掴むや一気に降下し、撃ち下す。

出鱈目なGに揺さぶられながら、三日月は齒を食いしばってガンダム・バルバトスを操る。

アトモイフイナル インテリジェンス  
管制用知性体が示した攻撃コースの中で、最大威力を選ぶ。

推進剤は空になる最終警告を理解し、ケリを付けるのだ。

必殺の意思が乗った大型メイスを前に咄嗟に回避運動を取れた事は、アインが非凡な才能を持ったMS乗りである事を示していた。

だがそれでもガンダム・バルバトスの攻撃範囲から逃れる事は出来なかった。

「浅い——」

勢いの乗った大型メイスは、アイン機の腕を叩き折り、フレームム構造体に深刻な損傷を与えた。そしてパイロットにも。

吹き飛ぶアイン機。

アトモイフイナル インテリジェンス  
管制用知性体がアイン機のデファイター搦座確率が低い事を算出し、報告して来る。

何より三日月の戦闘カンが、相手はまだ動けると告げていた。

追撃。

推進剤はもう残っていない。

三日月は踏み込み、致死の一撃を放とうとする。

『ヤッせんよー!』

クランク機が割り込んで来る。

牽制にと全身の機銃を発射しながら、バトルアックスを振りかぶってくる。

致死の一撃を放てば、同時に致命的な隙を見せる —— 三日月はその事を咄嗟に理解し、機体を操る。

勢いの乗っていたメイスを離し、その反動に合わせて大地を蹴って後退する。

無茶苦茶と言つて良い三日月の操作、だがガンダム・バルバトスの管制用知性体

は、歴戦であるが故に豊富な戦闘経験から、その操作を無理のないものへと修正してみせた。

機体の姿勢制御システムを全力で動かし、機体のバランスを崩さぬ様に魔法の様に慣性を取った。

お蔭で、ガンダム・バルバトスは両足で着地に成功する。

無くした武器の代わりは、足元にあつた。

オーリス機のバトルアックスだ。

連続しての第3戦。

だが、クランクは戦う事を選ばなかった。

戦闘の機は失われたと判断し、頭部後方に設置されている信号弾を3発、発射する。

白、白、赤。

全部隊への撤退命令だ。

併せて煙幕弾を発射する。

「っ！」

一瞬だけ失われた視野。

その一瞬を無駄にする事無く、クランクはアイン機を抱えて撤退した。

「退いた……のか………」

守れた。

三日月は、そう思った瞬間、盛大に鼻血を流して気絶していた。